

土井健司編著

『自死と遺族とキリスト教—「断罪」から「慰め」へ、「禁止」から「予防」へ』

(新教出版社、2015年)

マイケル・シーゲル

編者後書きによると、本書は、1998年から日本の自殺者数が年間3万人を超えていた状況を受けて、2010年～12年度に行われた「霊的支援者プログラム」の開発を目指す自殺を巡る共同研究に基づいており、掲載されている各論文はその研究プロジェクトから選ばれたものである。編者の説明の通り、自殺念慮者や遺族への関わりや自殺予防等への取り組みに向けて、特にプロテスタント牧師や信徒等の育成を目的にしたものである。『「断罪」から「慰め」へ、「禁止」から「予防」へ』というサブタイトルからは、自殺に関するキリスト教の思考の変動に関する少し神学的な話を予想したが、そのような内容は最後の論文にしか出ず、むしろ、多くの執筆者は様々な形の自殺問題に関わってきた経験について述べている。父親の自殺から最終的に牧師になり、自殺の予防に携わるようになった人、いのちの電話に関わってきた人など、自死予防に取り組んできた人、自死者の葬儀に携わってきた牧師や葬儀屋など、様々な立場で自死・自殺の課題に接してきた人たちの経験が語られていて、その経験に基づいた思索も展開されている。深く携わってきた人たちによる感想であるだけに、自死・自殺の問題に関わろうとする多くの人の参考になると思われる。

一方で本書の編集に当たっては、研究に携わった人たちやその研究が目指していた霊的支援者プログラムに関わる人たちやそれに参加する人たちが焦点になっている印象が強く、まったくの部外者にわかりやすくなるための工夫が欠けているように思う。タイトルから期待するような内容は最後の論文にならないと出ず、最初から、様々な現場からの語りになっている。後書きに書いてある説明がむしろ前書きに書かれていれば、読者は何を期待すればいいか分かり、もっと違和感なく読めるだろう。

最後の論文「自死の何が罪とされてきたのか」

は編者によるものである。自殺に関して歴史を通じてキリスト教が取ってきた姿勢を分かりやすく手短かにまとめているものであり、アウグスティヌスやアキナスの思想をかなり中心に据え、カトリックもプロテスタントも違和感なく参照できるものである。

この論文は、自殺は罪であるかどうかという問いかけに関して、自殺に関する理解の変動に焦点を当てているが、「罪」とは何かという理解の変動も重要であるように思う。現代の理解はただ単に罪を「神の掟を破る罰されるべき行為」としてではなく、むしろ掟も罪も本書が重視している関係性に関連付けて理解されるようになっていて、その変動も自殺に対するキリスト教の姿勢に大きく影響しているように思う。

それに、カトリックの人たちが違和感を持つところが少しだけあるように思う。本著では、カトリックもプロテスタントも自殺を罪とするが、「それが赦されるかどうか」に関して別れると述べている。確かに、カトリック教会は死ぬ瞬間のことを重視し、罪の赦しは死ぬ瞬間までととらえてきた。自殺という罪の行為は即座に死をもたらしものであるれば、赦されないとも考えられる。しかし、自殺の場合は、死に至らしめる行為と実際の死の間に意識のある間が少しでもあれば、その間に悔い改めることもあり得るので、その場合には赦しは可能である。それに、カトリックの思想で罪とはどのような条件で成立するかを考慮する必要がある。カトリックでは、罪とは、悪だと承知している行為を自分の自由な選択で意図的に行うことである。行為自体が悪であること、その行為を果たす人が行為自体が悪であることを承知していること、意図しているのはその行為自体であること、それを自由に意図することができるだけの自由な意志があることのいずれかが欠けていれば、罪は成立せず、赦しがあるかどうかは問題にならない。殺害（自らを殺害することを含む）は悪であると考えられている。しかし、たとえば人の命を助けるために自分の命を犠牲にする人が意図しているのは自分の死ではなく、もう一人を助けることである。これは罪の「つ」の字までもないことである。また、自由な意思を妨げる精神病や精神的な

悩みにによって自由意志が妨げられているならば、それは罪にはならず、赦しがあるかどうかは問題にならない。

したがって、自死する人は必ずしも自殺という罪を犯しているとは限らない。史上自殺したすべて人の中で実際にその罪を犯した人が一人もないことさえあり得る。カトリックでは、原則としては自殺者の葬儀をしないという慣習は確かに存在した。私はカトリックの神父であるが、1960年代に養成を受けていた期間において、自殺者の葬儀をすべきかどうかということが話題になった時、自殺した人が自由な意思が妨げられるほど追いつめられていたと考える理由があれば、葬儀を挙げるべきだと神学校で言われたことがある。私は挙手して尋ねた。「自殺したこと自体はそう考える理由になりませんか」と。その時、「そういう考え方でもいい」という返事を頂いた。本書の後書きには、「私は自殺者の葬儀はしません」と発言した神父の例が挙げられているが、それはまれな態度ではないだろうか。自殺者の葬儀がカトリック教会で断られた例を少なくとも私は知らない。過去において、そういうことは確かにあった。しかし、自殺に対する理解が変わっただけでなく、罪も救いも関係性に関連付けられて理解されるようになったこともあり、教会の自己意識は上から管理する権威から支え合う共同体へと変動したということもあって、葬儀自体は遺族のためのものだという認識も強まってきたことで、現在では対応が大いに変わっているのである。

橘宗吾著

『学術書の編集者』

(慶應義塾大学出版会、2016年)

大隅 直人

寺山修司の『幸福論』の冒頭の章「マッチ箱の中のロビンソン・クルーソー」は、すぐれた読書論である。寺山は、幸福というものについて書物の中で論じることの限界から話をはじめている。そこで繰り出される、この詩人らしい問いかけのひとつとして、たたみ一畳位の大きさと、厚い鉄の表紙のついた「偉大な書物」についての夢が

登場する。寺山は、こう書く。「要は、その書物をめくるに要する体力の問題にかかわっている。その鉄のページを、全力でひらいて「意味の世界」と対決するときの疲れ方——労働にも似たところよさのようなものが、なぜか欲しくなってくるのである」(寺山修司『幸福論』角川文庫、1973年、13-14頁)。

本書の著者も、序章「学術書とは何か」において、たとえば電子ジャーナルの普及にともなって、学術成果を「情報」として捉える態度が浸透している昨今の状況について、「ひとことで言えば、そこに欠けているのは、「作品」性であり、人間の知と身体を賭した信頼性の提供です」と言い切る(20-21頁)。第1章「編集とは何か」では、インターネットにおける検索機能の突出にたいして、「読むことが、特に体系性や世界性を読むことが、衰弱しつつあるように見えます」と指摘し、検索の便利さは否定しようもないが、「しかしそれは、読むことに取って代わることはできない」とし、「むしろ、不完全な情報の中で生きるしかない人間が、創造的に生きようとすれば、こうした、読むことによる自己変容・自己変革は最も重要なものの一つです。そしてこの自己変革こそ、イノベーションといわれるものの根本ではないかと思います」と述べている(30頁)。第2章「企画とは何か」においては、ケーススタディとして取り上げられている『漢文脈の近代』の執筆者である齋藤希史氏が第一草稿は必ず手書きで書くというエピソードを紹介し、そのことについて「これはコンピューターが苦手ということではまったくなく、いわば滑った文章、饒舌なだけの文章にならないようにするためだということでした。これにはとても感じるところがありまして、言いたいこともあります、これ以上はやめておきます」と記している(81頁)。ちなみに、この第2章には、重要な用件を執筆者がメールで伝えてきたことについて、「そんな大事なことをメールで言ってくるとは!と、だいたい腹を立てた」と書いているくだりもある(79頁)。

以上、序章から第2章にかけて、はなはだ偏った抜き書きで恐縮だが、およそ学術書にかかわる人間であれば、誰もがきちんと考えたい、考えね